



管理職が求める自然学校

前回のNO, 27に引き続き、10月22日の本校開校20周年記念シンポジウムでのパネルディスカッションで、小野市立来住小学校の中村校長先生に管理職としての立場から意見をいただいたものを、インタビュー形式でまとめてみました。来住小学校は、平成25年度の利用校で、「対立から協働へ」をテーマに掲げられていました。



Q：学校現場における自然学校のとらえ方に変化はあるの？

A：私が一番に思ったのは、先生方にとって自然学校の位置づけが変わってきているということです。校長としての1年目は、母と子の島に決まっています、自然がいっぱい素晴らしいプログラムでした。このプログラム自体はいいなと思いました。ただ、このプログラムは何が素晴らしいのかという先生の意識づけが薄いな、と感じました。先生方には、「キャンプと自然学校の違いは何か」というのを聞きましたが、先生方は、「えー。そんな違うの」という感じでした。5年生を持ったら、自然学校に行かないか、担任発表の時、覚悟してくれるわけですね。だから、自然学校をどう位置づけるかは、管理職の責任だと思ったんです。本校の場合は教育課程の編成方針に、体験活動を明記しています。うちでやる自然学校は、編成方針に基づいているということ、またもう一つ自尊心の育成を大きくあげているわけだから、これをするための自然学校だよということを担任と話し込んで、プログラムを作りました。今日の河合小学校と同じような活動を昨年実施しましたが、体験は同じかもしれませんが、体験から学ぶこと、学ばせたいことが違うはずなんです。そこをコントロールするのが管理職だなと思いました。それを担当や一担任に考えさせるのは、先生方には負荷がかかってしまうだろうと思いました。だから、4泊5日の自然学校というコーディネートは、管理職がしっかりしないと効果が上がらないと思っています。



Q：自然学校での子ども様子は？

A：本校の子どもたちは、保育所からほぼ同じ人間関係を引きずっているため、対立を避けます。とっても、いい子たちです。地域も穏やかですし、家庭も割合恵まれている子が多くて、学校も助かりますが、切磋琢磨や自己変革という感じが少ないです。そこで、子どもたちの人間関係を刺激するメインのプログラムを、「1本の木から」にしました。木を切ること、倒すことなど、そのときのおいや音、怖さといった原体験をさせたかったのですが、ひどく雨が降っていて危険だということで、切るところは施設の方にさせていただいて、約500m離れた工作室まで運ぶことにしました。途中で、子どもたちがもめごとでケンカを始めました。「誰がどこ持つんや」「しっかり持てよ」と言い合いをしています。ちゃっかりと、そのもめ事に入らず、一人で小さい木を持とうと判断している子もいました。学校ではみんなの動きにそっていき子が、雨の中の葛藤場面でイニシアティブをとって「えいかげんにしようや、やろうや」と言っています。「よいやさ～よいやさ～」と祭りさながらにみんなで声を掛け合って運んでいました。この

後、これを工作室に持って行って、皮をむいて、ひのきのにおいを感じ、そしてみんなで何を作るのか相談するのですが、その時の話し合いの時の空気感が学校で話し合いをする時と何か違いました。それは、担任も感じていて、すごくお互いにきちんと意見を聞き合うという動きが、たったこれだけのことでうまれるんだなと思いました。実は、自然学校をやる時、不足していると思ったのは、こういった様々な体験を価値づけて、子どもの意識に植え付ける場所がないということ



でした。だから、担任と相談して価値付けをする場面を最終日の夜に設定しました。それが、**メモリアルタイム**です。一人一人のハートの形のカードがあって、そこへ子どもたちがその子のいいところをすべて書いていきます。学校でも継続してやっていることなので、みんないっぱい書いて、欄の外まで書いていく子もいます。無意識下にある自分がやってきたことを友だちが価値付けてくれる、友だちから承認される体験をさせました。本当に子どもたちの感情が、ものすごく動いて、32人みんな感動のうちに終わることができました。こういう感情が動いて互いを認め合い、そこに価値を見出すという経験が足りない子たちだったんです。色々な体験を共有し、言いあいもして葛藤しながらも、お互いを認め合い、それをともに喜び合うということが出来ました。

Q：自然学校の問題点・課題は？

A：一番の問題は、先生方が本当に忙しいということです。自然学校の準備とか、プログラムを考えたりとか、ファイヤーがすごく負担だとか、出来る先生ばかりじゃないです。自然体験活動が得意じゃない先生もおられるし。先生方の負担を減らすためにも、専門家の力を借りることが、大事だと思っています。4泊5日の2泊3日分、特に専門性が求められる部分は専門家の人を1名お願いしています。お金がかかりますが、質の高い自然学校をするためにお金を使うべきだと思います。また、費用対効果を考えたら、有効だと思いますし、先生方からも好評です。2つ目は、指導補助員の指導です。でも、未来の先生を育てているという思いで、現場はやっています。

Q：今後の自然学校の在り方は？

A：とにかく、先生の想いのある自然学校にしてほしいと思います。去年のプログラムが、こうだから、場所も一緒だからこれをするじゃなくて、子どもを知っているのは先生なので、その子どもたちにとっての自然学校の意義を考えたら、こういう思いでやりたいというのをもってほしいなと思っています。プログラムという色々なだんごがあるんだけど、そのまん中を通す「くし」が大事で、それこそが先生の想いだと思います。この想いがなかったら、だんごの玉がばらばらになって、子どもの力になり得ないでしょう。4泊5日も、たくさんの時間と費用をかけてやるわけですから、「くし」の部分の先生の熱い想いを大事にしてほしいと思います。それと本校に関しては、「メモリアルタイム」は、絶対外せないプログラムとして、今年も大事にやりました。子どもたちが違うので、それぞれに感覚が違いますが、同じように感情がしっかりと動き、原体験を通した友だちからの承認体験は子どもの心に残ったことでしょう。これらは、自然学校でしか出来ないことです。このプログラムは伝えていこうねと言っています。管理職の力、管理職の考え方がすごく大きいと、自分がその立場になって感じているところです。

編集後記

シンポジウムでは、自然学校に対する管理職の確固たる考えが、随所に見られた発言がありました。特に、子どもたちの自尊感情を育むための様々な困難や葛藤を解決する体験の場が設定されていることの話が印象的でした。管理職がリーダーシップを取り、全職員で再度、自然学校について話し合う機会を作っていただくことを期待しています。 (文責 主任指導主事兼指導課長 北條 勝也)